

支援学校における行動問題を示す生徒への支援 ー 校内で取り組める支援の在り方について ー

学 籍 番 号 2 2 9 2 2 1
氏 名 山 本 圭 一
主指導教員 四 辻 伸 吾
副指導教員 庭 山 和 貴

1. 問題の所在と研究目的

□教育実践研究の目的は、在籍する生徒の行動問題に対して行動分析学を学んだ学級担任をもつコーディネーターが、他の学級担任と行動支援計画の作成と実行を可能とする教員支援プログラムについて検討し、行動支援プログラムの効果について考察することである。

特別支援学校における行動問題に対する支援では、応用行動分析学によるアプローチの有効性が広く認められている。A支援学校では、児童生徒の行動問題に対して機能的アセスメントがほとんど実施されておらず、行動問題への対処が難しい状況であった。そこで、行動問題の適切な理解や効果的な支援の方法を、学級担任が短時間で効率的に学ぶことのできる教員研修プログラムを開発して、コーディネーターとしての基礎スキルや知識を学級担任に提供し活用してもらう仕組みが有効か考察することとした。

2. 実践

2.1 手段

本教育実践研究の具体的手段としては、はじめに本教育実践研究に関する先行研究や文献資料、報告者が経験した事例や行動観察をふまえたワークシート教材、行動支援プログラム実施マニュアルを作成する。その後、これらの教材を本実践課題研究の主旨を理解し、合意を得た教員（以下、対象教員とする）に提供し、対象教員とコーディネーター（報告者）が行動問題のある生徒（以下、対象生徒とする）に対する校内で取り組める支援方策の実施を図る。対象教員と報告者が共に作成した行動問題に対する行動支援計画を実施した後、対象教員へのインタビュー調査を行い、本実践課題研究の課題や効果を検討する。

2.2 支援教材と支援プログラムの方法

「簡単なチェックで行動改善」（梅川，2012）から A 支援学校の行動問題支援の状況を踏まえて、行動問題に対する支援の方法の話し合いの回数を全 4 回とした。行動支援の方法の概要や行動支援プログラムの実施マニュアル（対象教員）を作成した。報告者がコーディネーターとして対象教員に接する支援の方法のマニュアルを作成した。各話し合いでは、対象教員が行動問題の観察期間中にワークシートに記録したものを基に報告者と話し合いながら、演習用ワークシートに記入する。報告者がワークシートを整理して行動支援計画を作成する。対象教員が行動支援計画を 4 週間実行した後、報告者は使用したワークシートを回収

し支援方法の結果をグラフ化して対象教員に示して、支援の効果を振り返る。

3. 考察と課題

3.1 インタビュー調査の分析

報告者は対象教員に校内で取り組める支援のプログラムについて半構造化面接を行った。得られた逐語録について、KJ法を用いて校内で取り組める行動問題の支援の方法をカテゴリーで分けて関係図に整理した。さらに、テキストマイニングソフトKH Coderを用いた階層的クラスター分析の結果やKJ法による関係図の項目から、共起ネットワークを作成して、A知的障害支援学校校内で取り組める支援の効果について考察した。

3.2 考察

本教育実践研究では、行動問題に対して校内で取り組める支援の方法を実行する過程で、教員が客観的に生徒の行動を捉えて、適切に対応できるスキルを獲得できるよう実践をすすめた結果、行動問題に対する支援および記録の実行と生徒の行動変容への効果や生徒理解の促進において、一定の成果を得ることができたと考えられる。コーディネーターとの支援手続きの共有については、負担感がなく取り組めたことが推察される。コーディネーターは対象教員の業務の様子を鑑みながら行動支援計画の立案や評価、改善または中止時期を担当の方針を汲みながら、実行可能なものとなるよう計画していたことが要因として考えられた。話し合いでは、「経験を伝える・励ます・担任のできているところを探す・担任の意見を共感的、肯定的に受け止める」ということにコーディネーターは留意した。参加した対象教員の考えや行動を肯定的に受け止めることを大切にする姿勢によって、対象生徒に対する見方や考え方が変容して、支援プログラムに肯定的な評価が得られた。

3.3 課題

本実践課題研究で実施した支援プログラムでは、行動問題に関する支援計画の作成と実行後の行動変容に成果がある程度認められたものの、対象教員がより負担なく簡便に実行できるような話し合いの方法や生徒の行動改善に関して同僚教員の理解を得られるという部分について、焦点をあてることができなかった。今後は行動支援計画を同僚教員も実行した際の対象生徒の様子について、どれだけの影響を及せたかについて、検討していく必要がある。

